

江戸東京博物館友の会会報

目次

「美しき日本一大正昭和の旅」展の見どころ	1	えど友サークルだより／「会議・会合日誌」	7
新役員紹介 私のプロフィール	2	えど友プラザ『平成の大合併のこと』	8
友の会セミナー『武士の家計簿』	4	同『ドイツ商船ロベルトゾン号の遭難』	8
友の会セミナー『戦後 60 年 ホタル帰る』	4	まんが『源内さんの江戸博さんぽ その 6』	9
見学会『江戸四宿を歩く一品川宿その 2』	5	江戸博界限⑤『都立横網町公園と中国料理・江城』	10
特別内覧会『発掘された日本列島 2005』展	6	催事案内	11
江戸博クリップ『菊池寛と犬の話』	6	他館優待のご案内／会員優待のお知らせ	12

「美しき日本一大正昭和の旅」展 好評開催中
大正期の日本紹介映画や川瀬巴水の版画など
—小山周子学芸員に見どころを聞く—

江戸東京博物館の企画展「美しき日本一大正昭和の旅」展が8月30日に開幕しました。企画を担当された小山周子学芸員にその見どころなどを伺いました。

—旅をテーマにした企画展は珍しいと思います。

小山 現在、国土交通省では“Visit Japan”という外国向け観光キャンペーンを行っています。ポスターを発行したり、CMを作ったりと。実はこれと同じような発想で同じようなことを大正から昭和初期にもやっていたのです。その歴史を見つめ直すことによって現在の観光を考える機会にしたいと思います。

—で、展示はどんな構成ですか。

小山 「旅のはじめに—プロローグ—



「東京十二月 麻布二の橋の午後」川瀬巴水画
江戸東京博物館蔵

「旅のいざない—外国人が伝えた日本」
「旅のイメージ—川瀬巴水とその時代」
「旅のひろがり—観光の進展」
「旅のうつろい—エピソード」の5章からなっています。

—一番の見どころは何でしょうか。

小山 そうですね、いろいろありますが、鉄道院とJTBが大正8年(1919)に制作した「ビューティフル・ジャパ

ン」という日本紹介映画は貴重です。室内で一部見られるコーナーをつくるほか、出口近い所では座って見られるようにして上映します。

—ほかに見どころは？

小山 博物館明治村からお借りした日光の金谷ホテルの調度品も珍しいものですし、川瀬巴水の絵は見ごたえがあります。特に巴水は海外では人気で、外国で版画家を3人挙げると「北斎・広重・巴水」となるほどです。「昭和の広重」とも呼ばれ、浮世絵の伝統的な技法で詩情豊かに日本の風景を描きました。館蔵の巴水作品もたっぶり見ていただけます。

—どうもありがとうございました。

(開催期間・8月30日～10月16日)

【聞き手】広報部会・松原良

会員資格継続 手続きの お願い

友の会の会則では、会員資格の有効期限は、入会の日から1年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

新役員紹介

(私のプロフィール)

5月27日開催の第5回友の会総会で選出された
新役員15名の自己紹介です。

よろしくご支援をお願いいたします。

*イラストは会員の藤井文乃さんに描いていただきました。

会計 管林義隆

(かんばやし・よしとか)

引き続き会計を担当させていただきます。でも、事業部会のお手伝いもさせていただき、特に「見学会」にはすべて参加したいと考えています。久能山東照宮、佐原、栃木に劣らず大勢の方々のご参加を心よりお待ちしております。新体制の下、これからも楽しい企画が日白押しです。素晴らしい活動が今後も続けられますよう頑張ります。



会長 岩松 精

(いわまつ・せい)

もともと建築関係の仕事をしてきたのに、どういうわけか江戸文化にのめりこんでしまいました。中途半端な江戸っ子ですが、祭りと縁日が大好きで、毎日のように東京都内を東奔西走しています。しかし体力がいまひとつ—今年はその対策が私の重点目標です。それに江戸の楽しい話のネタを仕入れて皆さんに笑って貰うことにも努力していきたいと考えております。



会計 玉木達二

(たまき・たつじ)

サラリーマン時代、全く歴史とは無縁でした。定年後に江戸博にやって来て、ガイドさん(実は山本前会長)の説明を聞いてから病みつきになり、今では友の会と展示ガイドの両面で楽しい日々を過ごしています。今年度からは会計を担当することになりましたが、もちろん皆様方との触れ合いの機会は大切にしていきたいと思っています。



副会長 藤永昭彦

(ふじなが・あきひこ)

古代史後半から中世史時代の権力者の変遷を勉強していると、「人の生死」ということに強い関心を感じます。心筋梗塞と胃の全摘出手術を受けていることもあり、残りの人生を大事にし、自分だけのものとしたくなく、再度役員を引き受けさせていただきました。心の中で毎日繰返している言葉は、「生きられる、生きねばならぬ、生きられる」(土屋とおる)



運営委員 芦沢陽雨山

(あしざわ・よううざん)

原稿未提出



副会長 松原 良

(まつばら・まこと)

「友の会」ができるのを知ったのは平成13年1月の企画展「大江戸落語展」のときで、そのときの1句が「落語好き九百円のもとをとり」。同年4月発足と共に入会、今は「友の会四千円のもとをとり」です。落語、野球(パ・リーグ)、川柳、雑俳などと相変わらず多趣味ですが、今後も楽しい友の会を目指して頑張ります。よろしくお力添えをお願いします。



運営委員 安西 洵

(あんざい・まこと)

美術館、博物館めぐりをしてたどり着いた所が江戸博で、建物の異様さ、日本橋からの入場など武家と町人文化を築き上げた江戸期260年にぐっと近づき、はまりました。入会から2年、昨年度はセミナー、古文書講座、見学会等のお手伝いをしてきましたが、今年は事務局長を仰せつかりました。会員の皆さんどうぞよろしくお願いいたします。



運営委員 岡橋園子

(おかはし・そのこ)

江戸博の大きな建物の中にどんな江戸と東京が展開されているのか興味津々で足を踏み入れてからどれくらいの月日が流れたのでしょうか。私の中での江戸博は遠くて近い存在になってきました。この度、友の会の役員に推薦していただきましたが、どれくらい会員の皆さまのお役に立てるか心配です。ご意見をお待ちしております。

**運営委員 谷岡文彦**

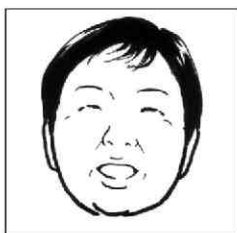
(たにおか・ふみひこ)

「友の会」に入会して4年になります。事業部会で古文書講座のお手伝いをさせていただいています。10年前から始めたウォーキング、週末には5～10キロを歩きます。平成15年秋江戸開府400年記念「江戸城登城ウォーク」に参加、代々木公園からゴールの日比谷公園まで完歩。これをきっかけに地図を片手に多くの江戸旧跡めぐりを楽しんでいます。

**運営委員 川辺愛子**

(かわべ・あいこ)

墨田区本所で生まれ育ちました。安田庭園や横網町公園など、江戸博の周辺は子供の頃の私の遊び場でした。毎年3月10日と9月1日は必ず東京都慰霊堂へお参りに行きます。私は江戸の風俗や怪談に、興味を持っています。原文を読めるようになりたくて「古文書講座」に参加しています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

**運営委員 伴野睦雄**

(ともの・むつお)

歴史が好きで江戸博に興味を持ち、友の会に入会しました。退職後は何か地元とかかわりを持ちたいと思っていたところに、同じ墨田区の「えど友」の募集をみて事業部会に参加しました。これまでは主に古文書講座のお手伝いをしてきましたが、今後は活動範囲を広げたいと考えています。

**運営委員 後藤幸子**

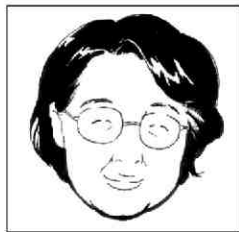
(ごとう・さちこ)

横浜より転居した都心で、自分の足元を眺めながら、古地図をめくる楽しみを覚えました。史跡見学を手始めに、古文書、庭園、歌舞伎と関心は広がるばかりです。毎日信じられないようなドラマが次々と掘り起こされる、そんな感動を味わっています。私にとって江戸博は「おもちゃ箱」いやまさに「宝庫」なのです。

**監事 井波良子**

(いなみ・よしこ)

私は幸せなことに、江戸博で5年余り仕事をしていました。ろくに江戸東京の歴史も知らないのに、せんえつにも国内外のお客様に江戸博の説明をし、今思い出しても顔が赤くなります。友の会会員の江戸東京への関心の深さと会運営の企画力に脱帽です。会の健全な発展に微力ですが尽くせればと思います。

**運営委員 菅沼和男**

(すがぬま・かずお)

『えど友』の創刊号(2001/7月発行)から携わって4年。慣れない原稿チェックのため各種の辞典(事典)類はもとよりインターネットでの検索、時には関係機関への照会や図書館へも足を運ぶといった具合に定年後の自由時間を使っています。経験無用。皆さんも会報作りに参加してみませんか。月例の広報部会にぜひ一度お立ち寄りください。

**監事 畠中 勇**

(はたけなか・いさむ)

オープニングのとき、はじめて見た江戸博の印象は、奇妙で図体の大きな建物、展示物の多くはレプリカで派手だけど深み、味わいはどうもというもの。その後平成10年から江戸博に勤めるようになり、展示物をじっくり眺め、それにちなんだ話を聞いてすっかりファンになりました。2年前仕事は終わりましたが、引き続いて友の会に入会。江戸の面白さに魅せられています。



第31回 江戸東京博物館友の会セミナー (2005/6/26)

「武士の家計簿」

—加賀藩御算用者の幕末維新—

講師 磯田道史さん

(茨城大学人文学部助教授)



6月26日(日)、第31回友の会セミナー「武士の家計簿」—加賀藩御算用者の幕末維新—が開催されました。講師は『武士の家計簿』(新潮新書)の著者で茨城大学人文学部助教授の磯田道史さん。「新潮ドキュメント賞」を受賞されるなど、高い評価を得ている講師とあって、満員のにぎわいでした。

そもそも磯田さんが『武士の家計簿』を書くきっかけとなったのは加賀藩御

算用者猪山直之のつけた猪山家の家計簿を神田の古書店で偶然見つけたことにはじまります。日本一の会計技術を誇る金沢藩の中でも最も優秀な御算用者であった猪山家は、自家でも家計簿をつけていました。猪山家は一時、年収の2倍以上にもおよぶ借金を抱え、年18%の高利に苦しみながらも天保13年に一念発起しなんとか借金の整理を成功させます。そして二度と借金をつくらぬことを決意し、それ以後

家計簿をつけはじめました。

今回のセミナーで主な資料として解説されたこの「^{いりばらちよう}入払帳」は、家族別の業代何服いくらといった、各々の支出入までが詳細に記され非常に密なものでした。江戸の社会は多くの記録を残したまれに見る社会であり、最もおもしろい歴史研究のフィールドの一つであると磯田さんはいいます。しかしながら武士の経済生活に関する史料は意外と少なく、歴史として残されてきたものも、その多くは本紀の列伝にとどまっていた。今まで垣間見る機会の少なかった武士の生活に触れ、楽しくわかりやすくひも解かれた今回の講演で、歴史を知ることのおもしろさを再認識することができました。

【取材】文・写真：広報部会・斉藤美香子

7月20日、鹿児島県知覧「富屋食堂」の赤羽礼子さんを迎えて、終戦間近、知覧から帰れぬ旅に飛び立った特別攻撃隊員との交流・体験談を聞きました。

当時、赤羽さんは14歳、女学校の3年生でした。赤羽さんは「富屋」という軍指定の食堂を営んでいた鳥濱トメさんの二女です。トメさんは片道の燃料と50キログラム爆弾を飛行機に積んで敵の航空母艦に体当たりしていく若き兵士たちの母親のような存在でした。まだ17歳くらいの兵士たちは「おばちゃん」と呼んでトメさんを慕い、出撃前夜には「おばちゃん、明日、見送りにきて」と頼み、トメさんは見送りに行ったりもしていました。

赤羽さんは、女学校で兵士の身の回りの世話をする「なでしこ隊」18人のうちの1人に選ばれました。朝早く家をでて松林の中にある兵舎に行き、隊員たちの洗濯や炊事などをするのです。帰りには彼らから両親宛の手紙をいっぱいあずかり、憲兵に見つからないように夜、人通りがなくなつて

第32回 江戸東京博物館友の会セミナー (2005/7/20)

戦後60年「ホタル帰る」

—鳥濱トメと知覧特攻隊員の物語—

講師 赤羽礼子さん



からポストに投函してあげていました。彼らは、肉親に現状を知らせることを禁じられていたのです。

「ホタル帰る」は、特攻前夜に20歳の誕生日を迎えた宮川軍曹の話です。宮川軍曹の誕生日を知ったトメさんは、彼の親友の滝本軍曹も呼んで、赤飯と煮しめでお祝いをしてあげました。翌日は二人とも飛び立つのです。宮川軍曹は何時までも故郷の話をしていたそうです。帰る前に宮川軍曹は「明日の夜9時に二人でホタルになって帰ってくるから戸を開けておいてね」と頼んだのです。

翌日は大雨で視界はゼロ。滝本軍曹だけは生還してきましたが、宮川軍曹は開聞岳の向こうへ飛び去ったままで

した。

その夜9時に、赤羽さんたちが入口を開けると1匹のホタルが入ってきたのです。「富屋」に居合わせた隊員たちは皆で「同期の桜」を歌っていました。終戦後、滝本軍曹は2週間かけて宮川軍曹の墓参りをした後、自宅で命を絶ちました。

特攻隊員たちは、もっともって生きたかったでしょう。やりたいこともたくさんあったはずですが。2度と戦争という悲劇を起こしてはなりません。トメさんは、死を日前にした何人もの人たちに安らぎの手を差し伸べて、その後90歳で世を去りました。

【取材】文：広報部会・岡橋園子

写真：同・佐藤幸彦

お寺の多い街・南品川を歩く

<江戸四宿を歩く> 品川宿一その2



▲新馬場駅に集合

南品川と北品川

「江戸の宿場を歩く」シリーズも3回目になりました。歩いてみて、南品川はお寺の多いところ。それも、そろって古くて、大きくて、美しいのが印象的。品川湊は江戸時代のはるか以前より、すでに内海周回と、外海に通じる海運の基点でありました。宗教各派が競って布教の拠点とし、これらを海で財を成した豪商、富裕人が支持支援したのが、主たる要因のようです。

北品川宿が江戸時代に入り、宿場あるいは盛り場の色合いを強めたのに対し、南品川はかつての様相を色濃く残していると総括できるように思います。

今回の出発点は京浜急行「新馬場」駅。北と南に宿場を分けた日黒川をまたいだ駅です。南口近辺は日蓮宗布教の中心地。道灌公が江戸城を築いた年に創建されたのが妙蓮寺、ここでの話題は丸橋忠弥の首塚でしょう。国道15号線の向こう側「松の寺」として有名な本光寺を訪ねました。日蓮の高弟日什ゆかりの寺で、雰囲気があります。

宿場町の定番「投げ込み寺」の海蔵寺。庶民の病苦を肩代わりして下さる「縛り地蔵」のある願行寺等を経て海徳寺へ。ここは富裕人の一人、鳥海氏が自宅を提供して創ったお寺。王貞治が、14才で没した少年を慰めるために贈ったバット片手の「ホームラン

地蔵」がありました。

第1回の北品川宿見学会の時にも訪れた南品川の鎮守、荏原神社に拝礼し、旧東海道へ。点々と植えられている東海道筋の松と、海岸に通じる傾斜路に、往時をしのびつつ天妙国寺へ。

ここは弘安8年(1285)の創建。熊野三山ゆかりの鈴木・榎本氏の強力な支援を実感します。また赤門は徳川家との親密な間柄の象徴と言えます。

青物横丁から品川寺

隣駅「青物横丁」は、かつての大井村の隆盛を感じさせるに十分な駅名ですが、古い地図を見ると、このあたりが宿場と大井村の境だったのでしょう。品川寺正門前に「脇陣釜屋跡」の標識がありました。幕末には新選組の面々も宿泊したようです。江戸六地蔵の一つがあつて、その奥が品川寺です。巨大な地蔵のお身体には、寄進者の名前が彫られています。品川寺は9世紀初めの創建ですが、将軍家綱の時代に再建されたそうです。有名な洋行帰りの鐘があります。慶応3年(1867)、パリ万博からの帰路に行方不明となり、後に発見、返還されたものです。第4班は住職のご好意で、至近距離から鐘を眺める好運に恵まれました。

「鮫洲」の名の由来

旧東海道から右に、海晏寺に通じる参道があります。海晏寺は江戸時代、「紅葉の名所」として有名。この参道にも茶屋が並び、さぞにぎわっていたことでしょう。このお寺、鮫の腹から出て来た観音像を北条時頼の命で祭ったのが始まりで、「鮫洲」の名の起こりでもあります。支援者、鈴木・榎本・宇井各氏の紋章にもそれぞれ鮫の歯が

デザインされているそうですが、古くからこの地が熊野地方と深いかわりがあったことを連想させます。ここには幕末四賢人の一人松平慶永、明治維新の偉人岩倉具視、東京府知事由利公正等の墓がありますが、非公開で「立入禁止」は残念でした。

土佐山と鮫洲八幡

芭蕉ゆかりの泊船寺を抜けると大井公園の一带に出ます。このあたり、江戸湾を一望できる高台にあつて、幕末頃に土佐藩下屋敷があつたことから、土佐山と言われていました。この地を愛した15代藩主、山内容堂は遺言でここに神式の墓所を残しました。一見の価値は十分でしたが、急階段は大変でした。

最終コースは鮫洲駅に隣接する鮫洲八幡社。漁師町の鎮守様です。海難と隣り合わせの漁民の信仰の強さを思いつつ、まずはお疲れさま。

台風の接近で、前日まで心配しましたが、朝から曇り空、参加総数72名でした。思えば昨年6月25日の品川北宿は、大変な暑さでした。「季節を考えたら」との苦言もありました。少し早めたら今度は雨の心配。ともかくも皆様方の日頃の心掛けに感謝の一日でした。



▲鮫洲八幡社で解散

【報告】 文：事業部会・玉木達二
写真：同・清水昌紘

企画展
**発掘された
日本列島 2005**
—新発見考古速報— 展



7月11日の午後内覧会開催されたこの企画展は江戸博の年中行事ともなっています。本年は旧石器時代から近世までの35遺跡、約700点の遺物が出品されています。先ず入場するといきなりキトラ古墳の石室の実物大模型を見せられます。現在、保存対策で話題になっているものですが、想像以上に狭く、壁画の調査や保存の工事が、狭いために大変な作業であることを思わせます。

本年の展示には、目を驚かすような大形の品はありませんが、発掘中のいろいろな遺跡から貴重なものが多く出土しています。古野ケ里遺跡の甕棺の被葬者が絹をまとひ、多数の貝の腕輪を付けていたこと、棺のふたの日貼り

から前漢の銘文入り銅鏡が出土するなど、現地に建ったあの巨大な櫓が説得力をもって来たように感じられます。伊勢の斎宮跡（三重県明和町）は台地137ヘクタールが史跡になっていて、十分な調査はこれからなのですが、すでに歴史博物館などが現地にあるようです。6センチメートルの可愛い動物の頭の土器が出土し、これが平城京出土の羊形硯と共通するというわけで、角と、胴体の硯の部分で補って展示されました。何やら深窓の美女を思わせてなまめかしい感があります。中世の遺跡では沖縄県の今帰仁城跡、広島県の毛利の一族古川氏城館跡。そして近世ではわが地元東京の日本橋や京橋で、市村座、森田座、中村座の切落札、土間札が出土しています。これらは木に墨書した、それぞれの芝居の入場券だそうです。

いろいろな物を掘出すのも喜びですが、それらの年代を決定することが重要です。年代決定が、近年のハイテク化で、20年前に比べて比較にならないほど高精度化しています。一つは「年輪年代測定法」で、柱の材木などの根もとに、切り出した木の最外層の年輪が残っていれば、何年に伐採したかを

鑑定出来るのです。法隆寺の前身と言われる若草伽藍の塔の芯柱の年輪から、塔の建立は西暦594年と決定されました。593年でも595年でもなく594年なのだと決定したのは驚異的です。

もう一つは植物が炭酸同化作用を停止した年代を、炭素の同位元素（原子量14）の放射能を測定して、求める方法です。この方法は40年ぐらい前に開発されたのですが、微弱な放射能を測定する難しさのため、当時は10000±2000年なんていうあいまいなデータでした。近年では、原理的にはこの方法を使いますが、加速器質量分析というもので格段に精度を上げています。展示物の裏ではこのようなハイテクによる測定技術が進んでいることが、紹介されています。

今回の展示には、美しい現地の全景写真、早川和子氏によるわかりやすいイラストが付されているほか、各遺跡へのアクセスが説明されており、現地で見学したい人の便宜に供しています。それらは朝日新聞社刊の図録（1500円）に、すべて掲載されています。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

菊池寛と犬の話

学芸員 金子未佳

明治～戦前までの新聞記事を調べる機会が多い。その作業中、目的以外の記事に吸い寄せられることがある。当時の世相を反映した記事や、現在でも市販されている薬の広告などは興味深く、ついつい横道にそれてしまう。

最近目に留まったのは、作家菊池寛の「犬とわたし」というエッセイである。この作品は、昭和9年1月3日付『読売新聞』文芸欄で、「わがマスコット」の第2回として登場している。

冒頭、「芝犬の仔を呉れたので飼ったが二三日すると、物を喰べなくな

て五六日目に獣医のところへやると、そこで死んでしまった。」とあり、その後は2度犬を飼い、相次いで数日間死んでしまった経緯がつつられている。

最初の2匹は餌を食べず、3匹日は生ゴミをあさってお腹を壊したと書かれているが、菊池寛がどんな飼い方をしていたのか、甚だ疑問である。昔の犬はみんな弱かったのだろうか？

「それで今度は、生後八ヶ月と云ふ芝犬を、六十圓出して買った。」が、庭で放し飼いにしたところ、錠前が壊れて犬が逃げ出してしまふ始末だ。

「犬とわたし」は、「今は、マルチスと云ふ犬を飼つてゐる。これは、人なつこく、おとなしい犬である。」と結ばれ、マルチーズらしき犬をちょこんとひざに乗せ、犬と同じ表情を浮かべた菊池寛の写真が掲載されている。

この「マルチス」は元気に成長したのだらうかと、とても気掛かりである。

なお、紹介した新聞記事は、7階図書室のマイクロフィルムで閲覧できます。気になった方は是非一読を。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

新サークル・メンバー募集!

* 古文書で『八丈実記』を読む会 *

「古文書の勉強をしてきてわずかながら崩し字が読めるようになり、まとまったものを読んでみたくなりました。しかし、一人ではおぼつかないのので仲間を募ることにしました」と語るのは世話人の岡橋園子さん。『八丈実記』は比較的読みやすい部類のものと思います。先生はいませんが、交代で読みながら疑問を出し合い、わいわい言い合いながら理解を深めていきたいと思っています。古文書は得意でなくても、江戸時代の八丈島やその生活様式・風俗に興味のある人も歓迎します」と同好の士の参加を呼びかけている。開催予定日は毎月第2木曜日13時半から15時半。部屋が狭いため、当面先着10名で締切る。

『藩史研究会』が正式に発足

(「江戸の理解を深める会」は解散)

* 藩史研究会 *

◆7月20日(水)に第1回の会合を開催した。このサークルは発展的解消した「江戸の理解を深める会」の後継としてスタート。世話人の大渡真

司さんから「テーマを“藩史の研究と墓域めぐり”と明確化し、初回は愛媛・伊予宇和島藩伊達家とその墓域のある品川・東禅寺に設定したい」との提案があり、8月と9月(藩未定)の研究発表、10月の墓域巡りなどが決まった。出席者は18名。

二つのサークルも順調に活動

* 江戸三十六見附を巡る会 *

◆6月5日(日)に赤坂見附駅より日枝神社、金毘羅神社、虎の門跡、河岸通り、幸橋門跡、山下門跡、数奇屋門跡、鍛冶橋門跡をめぐり東京駅へ至るコースを歩いた。参加者は17名。

◆7月10日(日)に東京駅から呉服橋門跡、一石橋・迷子しるべ碑、常盤橋門跡、貨幣博物館、神田橋門跡、一ツ橋門跡、雉子橋門跡、竹橋門跡などを見学して地下鉄九段下駅・竹橋駅へ歩いた。見学を手段として会員相互の親睦を図る趣旨も浸透してきた。参加者は15名。

* 落語・講談を楽しむ会 *

◆6月22日(水)に第8回会合を開催。今回はテーマを「東上野周辺散策と上野広小路亭(落語)」としたが、朝から強い雨で予定していた囃家さんの墓参りを一部中止し、お寺の前を素通りした。源空寺(談洲楼燕枝塚)、涼源寺(三遊亭一朝の墓)、聖徳寺(玉川兄弟の墓)などを巡り、囃家長屋跡(八代目林家正蔵居住跡)から下谷神社(寄席発祥の地碑)などを経て、稲荷町駅で散策を終了。昼食後、上野広小路亭で「しのかめ寄席」の落語を鑑賞した。参加者は8名。

◆7月20日(水)に第9回会合を開催。今回のテーマは「講談鑑賞」。昼食後、お江戸両国亭で女流講談会「なでしこくらぶ」を鑑賞した。メインは三遊亭円朝の代表作である怪談「乳房榎」の神田すみれ・神田織音による車読み(二人でリレーしながら読む)で、怪談をじっくり聞いた。参加者は8名。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。

申込先 130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局 Tel. 03-3626-9910

●新しいサークルを立ち上げてみようという方は事務局(上記)へ関係資料をご請求ください。

◆役員会

6月9日(木)18時から開催。新メンバーによる第1回会議。総会議事録の確認、総会当日の反省点などを話し合ったほか、事業部会から提案された催事参加費の改定案を審議し承認した(12ページの「友の会からのお知らせ」参照)。出席14名。
7月14日(木)18時から開催。友の会専用の部屋の提供、事務棟への役員・部会員の入館方法がそれぞれ決まったとの報告があった。会計より事務簡素化のため従来の複式簿記を単式簿記に変えた旨報告があり了承された。また、新規会員の加入が鈍化しているため各部会で具体的に新規会員募集獲得の行動を

会議・会合日誌

2005/6 ~ 2005/7

起こすことになった。出席12名。

◆事業部会

6月2日(木)18時から開催。部会の新体制・担当について説明があり了承された。4~5月事業の報告、8月までの担当者決定のほか、各催事参加費の改定案検討などを行った。出席20名。

7月7日(木)18時から開催。6~7月の事業の報告・確認を行ったほか、9月までの事業の確認、担当者の決定を行った。出席16名。

◆広報部会

6月22日(水)15時から開催。『え

ど友』第26号でのメーリングリストによる校正の効果と反省、第27号の内容と分担などを話し合った。出席9名。

7月20日(水)16時から開催。『えど友』第27号の内容確認のほか、『えど友Web版』における古文書講座の扱いについて検討した。出席8名。

◆総務部会

6月15日(水)14時から事務用品の整理などの作業を行った。

6月30日(木)14時から開催。『えど友26号』『江戸東京博物館NEWS50号』などの発送作業を行ったほか、えど友サークルの活動状況などを話し合った。出席10名。

平成の大合併のこと

桐井聡男

「平成の大合併」も落ち着くところへ落ち着き、少し沈静化されたようである。幸か不幸か東京都内は、ほとんどその影響を受けずにすんでしまった（※平成13年1月21日田無市と保谷市の合併によって、西東京市誕生）。しかしそれでよかったのであろうか。私の住んでいる東京下町、つまり台東・墨田・江東の各地区は、既にというのかかなり昔というのか、古い地名がなくなってしまうている。たとえば台東区の池之端七軒、象潟、黒門、猿若、三味線堀…。墨田区の請地、須崎、中之郷、松阪…。江東区では砂村が砂町へ、八名川、平井…。かつて下町は文化の発信地ともいわれ、多くの文人・文豪を育てた町である。産業も江戸が中心で流行品も多く、幾多の災害を免れた神社仏閣など有名な建造物も、その由緒歴史を誇っている。それが安易にあるいは利便性からか、いつの間にか改名されている。その地名感覚はどのようなものであろうか。思いついたものをメモしてみた。

- ①地名は過去の由来を調べるだけ
- ②地名は符号である
- ③懐古趣味によるもの
- ④地名は資料にならない
- ⑤地名はお上り決定するもの

このような理由によって感覚が衰えてきている。これは身体でいえば風邪のようなもので、だんだんと平衡感覚を失ってゆくのではないだろうか。

江戸博の企画展示室前の床に、約100年前の都内地図が描かれている。これをみて多くの入場者がいろいろの声を上げている。まことに結構な企画と思っている。このように多くの方々

が喜んでいる訳は、地名には伏流水に似た美しさがあるのであって、時の利便性に左右されるものではない。江戸博所在地の横網という地名も、隅田川で白魚漁の休みのとき、網を干していたからという。俗信かも知れないが、その土手へ行くため泥湿地に石を置いたのが石原町、石と土のみでは殺風景というので木を植え、それが成長して林町（現みどり）、林がもっと茂って森下。石川島の労働者に和んでもらいたいと思って、花を摘んだのが牡丹町、川続きの池の中に亀が住んでいたという芦原が亀沢…

松平定信による白河…

もちろんほとんどが俗信かもしれないし、正鵠を得ているとも思われない。またこのほか足立区に六月町、葛飾区の千葉、その近くの蔵之内、宿添、江戸川区の長島、桑川…

果たしてこれらの地名は符号であらうか、史料にならないのであろうか。過去に対する懐古趣味なのであろうか。地名改変は日本人の精神を侵犯し、地域住民の生活感覚をまひさせてしまうであらう。「地名を改変することは祖先への冒瀆である」といった、民俗学者谷川健一の言葉に思いをはせなければいけない。

歴史発見

ドイツ商船 ロベルトゾン号の遭難

清水良男

皆さんも博物館で見た展示品から、酒席での単身赴任の苦労話から、旅行中の友人との濫蓄から、思いもかけない歴史話を聞いて、感動し、もっと知りたい…と思ったことはないでしょうか。ここに歴史発見の面白さがあり、さらにそれを追求した結果を（その研究成果を）誰かに伝えたいという欲求に駆られることはないでしょうか。実はこのドイツ商船ロベルトゾン号の遭難は私の歴史発見の一つなのです。

20年前、夕方の博物館で…

今から20年前、沖縄に初めて出張することになった。その夜の接待までに2時間ばかり余裕ができたので、沖縄県立博物館まで足を伸ばしてみた。夕方の博物館はひっそりと暗く、人影もまばらで自分の足音だけが妙に響いて気になった。幾部屋かのぞいたところで、大きな拓本がガラス越しに目に留まった。「ロベルトゾン号遭難救助の記念碑」である。この記念碑は、明治6年（1873）台風で難破したドイツ商船を宮古島上野村の住人が救助し、手厚くもてなした後、本国へ無事帰還させた心温まる博愛の物語で、後にこの話を聞いたドイツ皇帝ウイヘルム一世は痛く感動し、3年後の明治9年（1876）宮古島の人々のために感謝を記した記念碑を建てることを思いつき、表に日本語、裏にドイツ語でその顛末を銘記し、遭難を救助した宮古島の人々に対する記念品と共に、宮古島に届けさせた。

その夜の宴席でこの話が話題になり、これが縁でお互いに急速に親しみが増したのと言うまでもない。その後取引先でも上京の際はこのことに関する資料をわざわざ持ってこられ、商談は商談として厳しいものがあつたものの話を花を咲かせてくれた。

事件を調べてみると

調べてみると、明治6年7月11日の夜半、折からの台風に遭遇し、宮古島宮国村沖に一隻の帆船が座礁しているのを遠見櫓から在所の役人が発見した。

この船がドイツ帆船「ロベルトゾン号」で中国の福州からお茶を積んでオーストラリアへ出帆、その途中で台風に遭遇した。救助された8名のうち、6名はドイツ人、2名は中国人で、ドイツ人のうち1名は女性であった。もちろん当時の宮古島の人にはどこの国の人かは分からず、通訳の中国人によってようやくドイツ人であることが分かったのである。当時の長老の

話では、万国旗を見せて分かったという話もある。絵や図を描いて、身振り手振りで大体のことが分かったような訳で、ドイツ人から中国人、通訳の役人、島の役人、村人達、というように伝わるのだから時間は掛かるし、途中で話が分からなくなったりで往生したりもした。とりあえず番所の近くに小屋を4軒建て、村人達が昼夜介抱することになった。番所の回りには夜通しかかり火がたかれ、家々からはアワのおかゆやたまごなどの食料品が届けられた。当時の宮古の生活からみればごくそうであった。まもなく天候が悪くなりロベルトゾン号は大波にさらわれ大破して沈没した。この事件は間もなく沖縄の首里王府（当時の政庁）に知らされ、彼らドイツ人の帰還について官船の調達も願い出ていたが、この申し出に対しても首里王府はなかなか許可を出さなかった。仕方なく宮古島の役人が自己の権限によって官船を調達し、盛大な送別会をした後水先案内の船2隻を付けて、無事中国（現台湾）に送り届けた。

明治10年でも主都は「江戸」？

現在の東京のドイツ大使館には、この遭難の翌年、つまり明治7年2月18日の北ドイツ・アルゲマイネ新聞の詳細記事のコピーが保管されている。

遭難救助記念碑の顛末については、明治10年（1877）10月15日の公文書、駐日ドイツ国臨時代理公使フォン・ホルレーベンから外務卿寺島宗則に宛てた保存文書がある。面白いのは日付の所には「Yedo」と書かれているので、明治になって10年もたっているのに、外国では首都がまだ江戸のままで東京になっていない事実が判明した。記念碑の建立記念式典当日の様子など興味深い記録も残っている。

博愛美談に

記念碑が建てられてから57年が経過した昭和8年（1933）、文部省から、各市町村単位で全国に知らせたい

源内さんの江戸+博さんぽ 4の6



実は、森下さん、この後、声が出なくなっただけで、今は、ファンの方から送られた（声の入った）テープでがんばっておられるのです（ガンバレ森下さん）。

美談の募集があり、優秀作品は小学校の教科書に掲載する旨の通達が発せられた。宮古島の先生から出された博愛のこの話は、全国で一等の入賞作となり、昭和12年（1937）国定教科書一尋常小学修身書に掲載され「博愛」という題でドイツ商船ロベルトゾン号のことが全国の小学校で教えられるようになった。またドイツ建碑60周年を記念して昭和11年（1936）宮古では博愛記念行事が行われ、宮国シナト浜には「独逸商船遭難之地」と刻まれた記念碑が建てられている。

残念ながら筆者はまだ宮古島に行ったことがない。沖縄には出張で何度も行ったが、いまだ宮古のこの記念碑を見ていない。今、ロベルトゾン号を救助した上野村には、「上野村ドイツ文

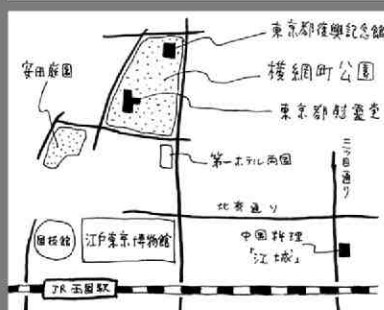
化村」が建ち、ホテルや、リゾート地ができてはいるはずである。手元にある上野村役場総務課発行のリーフレットには平成8年完成予定と書いてある。

参考文献

- ◆南島第三集『宮古島のドイツ商船遭難救助記念碑』江崎悌三
- ◆『博愛の心』上野小学校編集・発行（上野小学校長・佐渡山正吉）
- ◆『尋常小学修身書・巻四』文部省
- ◆『過疎の村苦悩と博愛の里づくり』上野村総務課 仲里雅彦
- ◆ドイツ大使館保存資料

【訂正】 前第26号6ページの取材・「高澤恵美子」は「高澤美恵子」、10ページのタイトルおよび小見出し「麦酒倶楽部・ポパイの台所」は「麦酒倶楽部 popeye・ポパイの台所」にそれぞれおわびして、訂正します。

【都立横網町公園】と
【中国料理・江城】



⑤

都立横網町公園

関東大震災と東京大空襲の犠牲者追悼施設や碑がある歴史的な公園です。

東京都慰霊堂（旧震災記念堂）

大正12年（1923）9月1日、相模湾海溝深部の激烈な大変動で起こった関東大地震。当時、2万坪余（6万6000㎡余）の広大な空き地だった被服廠跡（現公園はその一部）に4万人ほどが避難、うち3万8000人もの人がここで焼死しました。強風で付近から火が襲いかかり、人々が持ち込んだ家財に燃え移りました。さらに大旋風が巻き起こり、被害を決定的にしました。物も人も空中に巻き上げられ、墜落し、死骸の山ができたといわれます。最も多くの犠牲者を出し、茶毘に付したところとして記憶にとどめるため、人々は寄付を募り、昭和5年（1930）、震災記念堂を建設、東京市に寄贈しました。他の地区の犠牲者の遺骨もここへ集め、霊を弔い、無念の思いや苦しみを今に伝えます。

また太平洋戦争では、東京は空襲による無差別爆撃を受け、約12万人の人々が犠牲となりました。中でも最も戦禍の激しかったのは昭和20年（1945）3月10日の空襲で、8万8000余人の命を失いました。当時、殉難者は公園など各所に仮埋葬されていましたが、同23～26年（1948～51）に



遺骨が集められ、この納骨堂に納められました。そのため震災記念

堂は東京都慰霊堂と改名します。

この慰霊堂は築地本願寺や明治神宮を手がけた伊東忠太の設計。内部には震災の状況を描いた徳永柳州の絵画、大空襲の惨状を撮った石川光洋の写真が左右の壁に展示され、当時の悲慘な状況を伝えています。

毎年9月1日と3月10日には、朝10時から都内寺院の60人を超える僧侶が出席して勸東京都慰霊協会により法要が行われます。また地元亀沢1丁目町内会の有志による甘酒あるいは蜂蜜水が無料で振舞われ、ことに9月1日には国道に露店も出て夜まで賑わいます。

復興記念館

関東大震災の事跡と復興事業を伝える品々を保管陳列するため昭和6年（1931）、募金により建設して東京市に寄贈。建築的にも玄関ホールや階段室、2階中央の展示室など昭和初期のデザインの特徴がよく表れています。1階は震災当時の記録や写真、記念品、2階は絵画や海外からの援助や復興の資料、帝都復興展での展示模型など展示されています。



幽冥鐘

震災のとき、各国から多大な援助が寄せられました。中華民国（当時の中国）もすぐ寄付を募って慰問品を寄せ、仏教界はあげて弔意の大行事を催し、この幽冥鐘（ゆうめいしょう）を寄贈してくれました。鐘楼は慰霊堂のすぐ南東にあります。

その他の像や碑

震災で亡くなった5000人の児童を悼んで作られた「関東大震災遭難児童弔魂像」、震災のとき虐殺された「朝鮮人犠牲者追悼碑」や東京空襲犠牲者の名簿を納めた「東京空襲を追悼し平和を祈念する碑」などがあります。

開園時間 9時～17時。
休園日 毎週月曜。12月29日～1月1日。
江戸博より徒歩7分。墨田区横網町2-3-25
電話 03-3622-1208



中国料理「江城」

中国吉林省から来た「残留孤児」の一家が営む店です。借り店舗で営業していたが、頑張って6年前に現在の亀沢4丁目の店舗を入手したそうです。

一口に中国料理といってもいろいろあるが、ここは東北料理の店。その特徴はしょうゆを使うことだそうです。この店一番の売れ筋「揚げ豚のしょうゆ煮」（1650円）は、その代表料理です。肉は軟らかくとろけるようで、そんなに辛くはなく、思ったほどくどくありません。肉の下に小松菜がたっぷり敷かれているのがありがたい。小松菜にはこだわり、軸の細いものしか使わないと言います。

しょうゆ味ばかりかと思ったら塩味のためも多く、あっさりしたなかにコクもあって、なかなかいい味に仕上がっていました。そういえば「ラーメン」（580円）もあっさりした透明なスープで、焼き豚が3枚、もやし、小松菜がのっていました。焼き餃子（380円）、蒸し鶏のねぎ油かけ（850円）、豆腐とピータンとザーサイの盛合わせ（470円）などがよく出るそうです。

昼は週替わりのサービスランチ（650～850円）があり、メニューの数は少ないが、夜はぐっと増えて60種類ほどあります。料理は1皿の量が多いと定評があり、2～3人でいろいろな料理をつまむといい。

営業時間 11時半～14時半、17時～24時。定休日は月曜。祝日は営業。
江戸博より徒歩15分。墨田区亀沢4-11-3
電話 03-3829-5571

【取材】 文：広報部会・大野晴美、
写真・地図：同・松原良
【協力】 東京都慰霊協会
【参考文献】 吉村昭『関東大震災』

催事案内

古文書講座

第2期を10月から開講

古文書講座の今年度第2期を10月から開講します。

第1期と同様、「入門編」、「初級編(1)」、「初級編(2)」の3講座です。ぜひご参加ください。

すでに第1期を受講されている方については、特に不参加の申し出のない限り、自動継続となりますので、お申込の必要はありませんが、別の講座を希望される場合には、改めてお申込が必要です。

◆第2期の日程など

- * 入門編 10月5日(水)、11月2日(水)、12月7日(水)
- * 初級編(1) 10月19日(水)、11月23日(水) 12月21日(水)
- * 初級編(2) 10月15日(土)、11月19日(土)、12月17日(土)
- ・ 開催時間：すべて 14:00～16:00
- ・ 定員 各80名
- ・ 会場：江戸博1階会議室または学習室1・2のどちらか(当日お確かめください)
- ・ 講師：野尻泰弘さん(品川歴史館)、小宮山敏和さん(学習院大学大学院史学専攻)、小松賢司さん(同)が交互に担当
- ・ 参加費：1講座 1,500円(初回当日払い・各講座とも)
- ・ 申込締切：入門編 9月20日(火)必着、初級編(1) 9月30日(金)必着、初級編(2) 9月27日(火)必着

◆第1期の残り日程

- * 入門編 第1期：第3回 9月21日(水) 14:00～
 - * 初級編(1) 第1期：第3回 9月21日(水) 17:00～
 - * 初級編(2) 第1期：第3回 9月24日(土) 14:00～
- 【企画担当責任者】谷岡文彦(事業部会)

特別内覧会

企画展「生誕120年 川端龍子」展

◆川端龍子は挿絵画家として活躍した後、卓抜な画技や大胆な着想、自由奔放な主題の選択などから注目されました。「会場芸術主義」を目指して壮大なスケールの作品を残した異端の日本画家の生誕120年を記念し、その代表作から彼の足跡をたどる展覧会です。

- ・ 開催日：10月28日(金) 午後(開始時間未定)
- ・ 開始時間は申込んだ方には受講票でお知らせします。
- ・ 申込締切：10月18日(火)必着
- ・ 会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
- ・ 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・ 参加費：会員500円、同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】米山彰(事業部会)

友の会セミナー

第33回「旧制高等学校物語」

講師 秦 郁彦さん

◆現在では消えた文化遺産として、またよき思い出として語られるだけになった敝衣破帽の学徒に象徴される旧制高等学校。帝国大学の予備校的性格を持ち、語学を中心に一般教養に重点を置いたカリキュラムで学習し、ほぼ全員が帝大に進学できたよき時代でした。各校の名物教授、寮生活、学校文化の違い等を寮歌や校歌をまじえ、その黎明から昭和23年の廃止にいたるまでの変遷をたどります。

○講師略歴：はた・いくひこ

1932年12月生まれ。東京大学卒業後、大蔵省入省。プリンストン大学、拓殖大学、千葉大学、日本大学教授を歴任。現代史家。

- ・ 開催日：9月23日(金) 14:00～15:30
- ・ 申込締切：9月12日(月) 必着
- ・ 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・ 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・ 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】大倉和寿(事業部会)

見学会

「相撲史跡探訪 その3」本所コース

◆相撲史跡探訪その3は江戸～明治時代の横綱の墓や高砂頭彰碑などの史跡を探訪します。主な予定コースは江戸駅一亀戸天神(高砂頭彰碑)―普門院(第9代横綱秀ノ山の墓)―法泉院(第16代横綱西ノ海の墓)―錦糸町駅です。

- ・ 開催日：10月22日(土) 13時集合
- ・ 集合場所：JR 亀戸駅北口改札前
- ・ 申込締切：10月7日(金) 必着
- ・ 定員：80名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・ 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)

お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
- ◆締切：各催事の案内をご覧ください(必着)。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく水曜日から金曜日にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。



他館優待のご案内

友の会会員の特典の一つとして、会員証を提示すれば、東京都歴史文化財団に属する次の博物館や美術館での優待が受けられます。どうぞご利用ください。

◆江戸東京たてもの園

常設展は一般料金の20%引き。ミュージアムショップ5%引き(一部商品除外)、「蔵」(うどんなど)100円返金、「茶房」(軽食・喫茶)20%引き。☎042-388-3300

◆東京都現代美術館

常設展・企画展は一般料金の20%引き。ミュージアムショップ(一部商品除外)、カフェ5%引き。☎03-5245-4111

◆東京都写真美術館

収蔵展・企画展とも団体料金適用。1階ホールの実験劇場は上映によって割引率が変わる(一般的には1800円が1500円に)。☎03-3280-0099

◆東京都庭園美術館

庭園・企画展とも一般料金の20%引。ミュージアムショップ(一部商品除外)、カフェ10%引き。☎03-3443-0201

◆東京都美術館

企画展・公募展とも団体料金適用。ミュージアムショップ、レストラン、カフェ5%引き。☎03-3823-6921

◆東京文化会館

ショップは5%引き(チケット、CD、書籍は除外)。精養軒で食事の場合、コーヒーか紅茶、またはソフトドリンクをサービス。☎03-3828-2111

※なお、各館ともサービス内容に変更がある場合があります。

●●●友の会からのお知らせ●●●

友の会が主催する催事の参加費については収支バランス等を考慮して、会員は1催事一律500円(古文書講座は3回で1500円)とすることで先の総会でご承認をいただきました。その後、同伴者の参加費について「特別内覧会」で不都合が生じたためその見直しを行い、6月開催の役員会において「特別内覧会」「友の会セミナー」に限り以下のように改定することになりましたので、遅くなりましたがお知らせいたします(従来は会員・同伴者とも同額)。

	会員	同伴者
特別内覧会	500円	700円
友の会セミナー	500円	600円
古文書講座(3回)	1,500円	—
見学会	500円	500円

会員優待のお知らせ

好評開催中!

●企画展「美しき日本 大正昭和の旅」展

会期 2005年8月30日(火)～10月16日(日)
休館日:月曜日(ただし9月19日、10月10日は開館、
9月20日(火)、10月11日(火)は休館)

図録 定価、会員割引ともに未定

会員:一般450円、65歳以上220円、大・専門生360円
同伴者:一般720円、65歳以上360円、大・専門生570円

次回予告

●企画展「生誕120年 川端龍子」展

会期 2005年10月29日(土)～12月11日(日)
休館日:月曜日

第2企画展ご案内

好評開催中!

●「安政の江戸大地震150年」展

開催期間 2005年9月1日(木)～10月16日(日)

江戸博歌舞伎 会員優待

第18回 歌舞伎フォーラム公演

第1部 歌舞伎に親しむ「歌舞伎の美—効果音」

第2部 歌舞伎舞踊「櫓のお七」

第3部 歌舞伎「菅原伝授手習鑑—松王下屋敷」

公演日 9月6日(火)～24日(土)

会場 江戸東京博物館 1階ホール

料金 Aプロ(第1部から第3部)

S席 当日料金5,000円のところ **3,600円**

A席 当日料金4,500円のところ **3,200円**

Bプロ(第1部と第3部のみ)

S席 当日料金4,000円のところ **3,000円**

A席 当日料金3,500円のところ **2,700円**

*日程その他の詳細お問合せ・お申込は

歌舞伎公演事務局 TEL 03-3544-4911

江戸東京博物館友の会 会報<えど友>第27号

平成17年9月1日発行

奇数月刊。次号は11月1日発行予定

編集・制作:友の会広報部会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910

発行人兼編集長:松原 良(副会長) 副編集長:菅沼和男

編集人:岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、小柳英二郎、

斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄